

短大生の学力とは / <ことばの力>が自分を育てる

青山学院女子短期大学教授

栗坪良樹氏

就職問題委員会副委員長

(1) <フィールドワーク>の実践

できるだけ荻野先生のご講演を引き継いで、お話させていただきたいと思います。

荻野先生のお話の中で、私が受け止めたことは、大枠として、今の時代は、これまでずっと続いてきた序列といいたいでしょうか、システムが壊れて・・・、壊れている最中なのか、壊れてしまったのか、まだこれからもっと激しく壊れるのか、その辺の認識を持たなければいけないと思ったことが一点です。つまり、現在の序列は、従来の序列とは違う形の中に入ってしまった。初日の企業の方や幼稚園の園長の話にも、それを感じました。我われが何となくぶら下がってきたようなシステムが、ずっと壊れ続けている。それがどうして壊れ続けているのかということがよく分からない。けれども壊れ続けているという認識だけは共通して持ちたいと思いました。

それから、荻野先生の講演で見せていただいたビデオを、私も実際にNHKの放送で見たのですが、企業ができるだけ正社員を雇わない、雇えない。しかし生産は継続しなければいけないので、当然、人件費にお金はかけられない。私たち学校人は、フリーターという存在が日本の製造業において、これほど大きな役目を果たしているという認識は、共通認識として持っていない。フリーターというのは、折角、教育を施して、送り出してやろうとしているのに、ちっとも奮発しない。社会に出ては行こうとはしているのだけれども、要するに正業に就こうとしない。それで、なんとなくマイナスの人間のように、けしからんやつ、という認識がどこかに有りはしないだろうかと問えば、有ると思うのです。ニートもそうです。若者のメンタリティということがかなり問題だなとここ10年ほど前から思っているのですが、このメンタリティの中に一旦降りて、そこから私たち自身の現状をもう一回再構築する。それがより一層、必要になっているのではないかと思います。

それから、私は教壇に立って授業をしています。毎時間、書いたものを提出させ、それを読んで、次の週にはこのような意見があったということを紹介し、それに対する意見を言ってくれというようなことをしていますが、荻野先生の授業で、なかなか興味深いと思ったことに、“取材をしてくらん”という指導をしておられること。これは私たちの授業ではあまりないことです。例えば、フリーターの人に取材をしてくらん。企業に行って取材をしてくらん。自分は企業から採用してもらって側だけれども、採用する側に取材してくらん。これは言うならば、実習が伴うような、考古学などや、理科系の学問などには、フィールドワークということがあります。文化系の、教養系の授業だけれども、取材をさせている、フィールドワークをさせているというところがかなり新しいと思いました。この3点は大事にしておきたいと思いました。

フリーターのことは、先ほど申しましたようにフリーターなしでは企業は成り立たない。100万人のフリーターがいると言われていました。その真ん中に、請負人という仲介業者がいる。気がついてみると、一生懸命送り出してやろうとしている私たちが請負人になっているのではないかと、という気がします。私たちは請負人になってはいけません。企業と学生の間で立って、送り出していくという役目ですが、請負人と同じになってはいけません。荻野先生の講演を伺っていて、このような感想を抱きました。

(2)<学力低下>とは何か

そこで、短大生の学力について考えるとき、非常に大きな衝撃だったことに、2004年12月にOECDの世界41カ国の15歳の人たちの学力に関する調査、その前は2000年に実施したようですが、日本の15歳人口の学力が、わずかその4年間で著しく低下したというようなことが大きく新聞記事になった。結局、そのことが一つのバネになって、資料集に新聞記事を掲載しておりますが、<文字・活字文化振興法>という法律ができたのです。超党派で、これは大変なことだ、日本の子どもの学力がこれほど低下しているとは思わなかったということで、できたわけです。有り体に言えば、そういうショックをうけて、あわててこのような法律を作ったのです。うすうすそう感じている人はいたと思います。私などは、10年以上前から感じていました。実際に教場に立っているわけですから。読み・書きが著しくダメになったと分かります。教科書の内容、実際、教科書も編集していますが、どんどん低下していく。

昨日、グループ討議をのぞかせていただいた時に、今の学生は<7掛け>でないとダメだというようなことが話題になっていました。20歳だったら、要するに14歳。それは精神的にも、学力的にも、その程度だというわけです。14歳というと、中学2年生ということになるわけです。私は40年間、国語の教師をしています。このことはあながち間違っているとは言えないのです。40年前の20歳、あるいは40年前の15歳と、今の20歳、15歳と比べたら、それは読み・書きに関しては、著しく変化がある。どうしてそういうことになったかということは、非常に大きな問題で、ちょっと今日はしゃべりきれないので、置いておきますが、そういう現状なのです。現状は知らなければいけない。しかしながら、20歳は20歳なのです。先ほど、18歳で選挙権をといるお話がありましたが、今の<7掛け>ということが、もし、共通認識であるとするならば、18歳の<7掛け>は、小学生の高学年になってしまう。その歳の学生に自己判断させる能力があるのか、ということになります。したがって、年齢というのは、私たちが生きているこの時代には浮動していると思うのです。つまり価値観とか、システムが浮動していることと、年齢が浮動しているということは、たぶん釣り合っているのだと思うのです。

(3)<コミュニケーション>とは何か

学生たちの現状がどうなっているのか。OECDの結果では、断然、数学もダメです。つまり思考力がダメ。要するにことばがダメということなのです。つまり読解力がダメということです。アジアでは、総合能力で韓国が2番でしたか。かつて日本は、ベストテンの中の

上位の方にあっただのですが、完全に脱落してしまったのです。何がそうさせているのか。教場からしか覗くことができないのですが、読み・書きがダメ。読み・書きがダメということは、書く・聞く、そして話す能力もダメということに連動しています。したがって、非常に自分の位置が定めにくい。そこで私の授業では、10年くらい前から、読むこと・書くこと・話すこと・聞くこと、それからついでに見ること。仕方がないから、読むのが苦手な人は、徹底して映画を見てくれとあって、映画を見せています。そして、見たり、読んだりしたら、必ず、手書きの文字で提出してくれと言っています。デジタル文字、電子文字ではなく、手書きの文字です。そうすると、面白いことに、いきなりは手書きで書けないので、一度デジタル文字で書いて、それを手書きの文字に変換するという、一種の翻訳家がではじめたのです。これはこれで、なるほどと思ったのですが、実はみんなデジタル世界にはまってしまっている。電車に乗っていても、みんな静かにしているようですが、殆んどメールで何かやっているのです。

企業の方たちの話や荻野先生の話をもとにして、トータルして因数分解してキーワードを抽出しますと、<コミュニケーション>ということが出てきます。では、一体コミュニケーションとは何かと申しますと、相手を求めて、相手とやり取りをするということなのです。その相手とやり取りをするときの、媒介となるものは何かと言えば、それが<ことば>なのです。したがって、読んで、書いて、相手を意識しないような、一方的なものであったら、それはコミュニケーションにはならない。だから電子文字で相手とやり取りをしても、それは基本的にはコミュニケーションにはならないということを、断固として、私は強調しています。そうすると、それなりにショックを受ける学生がいます。

そして、先ほど申しました、読むこと・書くこと・話すこと・聞くこと・見ることの全体を因数分解して、抽出しますと、全部、向こう側に<他人>がいるわけです。自分がいて、他人がいるわけです。見ることというのは、見る対象があるわけです。絵を見る場合でも映画を見る場合もそうです。

今、成瀬巳喜男の作品を上映していますが、どうぞご覧になってください。昭和20年代、30年代の日本人監督の大事な人ですが、しかし、日本人はこの映画作家をちゃんと評価していませんでした。むしろフランス人とかアメリカ人が評価して、向こうから評価がやってくる。往々にして、日本の文化というのは、気がついてみると私たちはどういう訳か、評価を棚上げにしてしまって、西洋人が評価すると、その評価に乗っているわけです。そのようなことがなぜ起きるのか。これもまた話し始めると、この時間ではしゃべりきれないので、こっちに置いておきます。ただそういう現実になっているということだけは、知っておいたほうがいいと思います。私たちは日本人であるけれど、日本人そのものも、私たちにとっては他者になってしまっている。帰属意識というか、アイデンティティということについては、気がついてみると、私たち自身も非常に希薄になっている。それが総じて、子どもたちの世界にも影響を及ぼしているという恐れというか、実態があります。日本語はしゃべっているが、どこの国の人間であるのかということも、もう一度問い直してみる必要があると思います。

結局、国家がらみで法律を作って、読み・書きをちゃんとやり直そうと言っている不思議

な日本だということを再認識する必要があります。中学校から高校へは約96%、高等学校から高等教育（高等専門学校、短大、大学）に進む人は、大よそ2人に1人くらいです。にもかかわらず、総じてその長期に学校に行っているという意味が共有できていない、身につけていない。ですから企業の人たちは、いわゆる成績とか、偏差値などは基本的には問題にしていないということを言われていたと思うのです。その人が自分の会社に入って来て、役割を負わせたら、その役割を担える人かという、そのことしか見ていないということです。そうすると、学校という意味は、今一度問い直されなくてはならないということになって、私たちのところに返ってくるのです。そういうことを考えに入れて、短大生の学力を見ていきます。

(4) <学ぶ>こと、すなわち<模倣>すること

今度、入試センターでは、あまりにも不勉強ということを認識したのでしょうか、科目数が増えて、それだけ受験者にはノルマが課せられることになります。そうすると、それをこなせる人とこなせない人がでてきて、また差がひらきます。

短大は2年間です。先ほど荻野先生が言われたような意味では、私も、2年間で充分だと思っています。2年間で、とにかく取れるだけの単位を取って、しかるべき企業に勤めて、そこを大学だと思いなさいと言っています。私は学長を8年間つとめました。その時からずっとそのように言っています。‘短大に入学した以上、2年間で卒業してください。そしてしかるべく社会化をしてください。つまり勤め人になってください。勤めたらそこをも学校だと思って勉強してください。’と言っています。学力といいますが、私たちはカリキュラムをこなして、積み重ねて、単位にしている、ということ学力を思っていますが、実は違うのです。学力の学は、学ぶという字ですが、これは‘まねぶ’です。つまり真似をする、模倣するという意味と殆ど同じだと思のです。アカデミズムとか、まさに専門的な学問をするというのとは意味が違って、どこまでいっても真似をするということなのです。したがって、ある高名な著者の本を読んだとする。その著者の真似をするという時間がしばらく続いていいわけです。別の人のを読んだら、乗り換えて、またその人の真似をする。真似をするということを継続しているうちに、そこからたぶん自分が現れるだろう。現れなかったら、どこまでも真似をしてくれと言っています。私は中学・高等学校の国語の教員を十数年務めて、それから短大に来て、すでに30年が経っていますが、一貫して、それしか言っていないような気がいたします。それから教壇で私が言っていることは、全体が10だとしたら、私がしゃべっていることは、1か2。役に立つことは1か2で、あとの8か9は、あなた方の問題であって、私の知ったことではないという気持ちなのです。ですから学力というのは、カリキュラムをこなして、ダブルAをつけるとかAをつけるということとは違うと思うのです。高名な絵描き、いかなる絵描きであっても、模写ということをするのです。非常に丁寧に模写から始めているのです。そういう時間がかなり長く続いていると思うのです。

(5) 抱擁しながら非情であること

私たちは生半可な哀れみ、憐憫を人にかける癖をもっています。自分より立場が弱いと感

じる人たちに同情する。しかし、ずっとこの人たちが浮上するまで、同情し続けることが出来るかと言えば、そんなことは絶対にあり得ない。途中で放棄する。松尾芭蕉が面白いことをいっています。芭蕉が旅をしているさ中、どこだったかは忘れましたが、赤ん坊が捨てられているのに直面します。そうしたら、芭蕉はその捨てられている赤ん坊の顔をジーと見て、なんて言ったかといいますと、『親を恨むな、親を恨まず、お前の運命を恨め』と言って過ぎていったというのです。それを読んだとき、すごいな！と思いました。私はそういう非情というものが、結構大事だと思うのです。

私たちは学生に対して、どこかにそういった非情さを持っていなければならないと思います。非情さを持ちつつ、しかしながら抱きかかえてやる。抱きかかえつつ、非情でなければいけない。そうでないと相手の人生を狂わせる。私は、学生に対して、従来から学生の話を一時間・・・、二時間・・・、と聞くことは絶対にしない。せいぜい15分聞いて、また明日いらっしゃい、場合によっては明後日もいらっしゃいというように、問題を与えて帰す。ということが必要だと思うのです。そうでないと、学校はいわゆる‘まねぶ’つまり模倣する媒介する機関ではなくなって、とにかく雪崩れ込んできたら抱えるというような、養老的な、そういうことになってしまう。それは止めたいと思うのです。

先ほども言いましたように、学力というのは、‘まね(真似)ぶ’能力です。偏差値は関係ありません。器用に真似る人は、そんなにたくさんのもを讀まずに、一冊の本を非常に丁寧に読んでいるのです。ちゃんと勘どころをつかめる人は、つかめる。それからことばの問題でいえば、例えば、おじいさん、おばあさんと、つまり三代の系列で一緒に住んでいる人たちは、不思議なことに、ちゃんと言葉をもっているのです。しかし、父、母というと、父親はほとんどいないという状況、つまり父親の機能は、ある意味ではほとんど介在していないに等しいとなると、おのずとお母さんとべったりになる。そうすると、特に一人息子の場合は、気がつかないうちに無理心中しかかっているのです。かつて男子校に勤めていましたから、そういう感情は非常によくわかります。なんでそうなるのかと言えば、やはりお互いに言葉もって、母と子がやりあっていれば、個がぶつかり合うことになるのですが、言葉がないとぶつかり合いもしない。親はひたすら抱きかかえる。そのような流れが、何となく、ずっと続いている。それはどうしてかと言えば、根本には、中くらいに金持ちになってしまったということがあるのです。中流化してしまった。中流化が全体を擁して、そうこうするうちに、お金の力で何かすぐに片付いてしまうということに慣れきってしまった。本当の金持ちというのは、私が見たところ、絶対に金を使いませんですね。そういう点では、消費の社会で言いますと、中産階級が金を使わないとどうにも動かないという日本になってしまっていて、そのあおりが親子関係から、子どもの‘まね(真似)ぶ’力にまで反映しているのだらうと思います。これも詳しく話していったら、時間がかかりますので、このくらいで留めておきます。

(6) 序列が再編成されてゆく

そこで就職と学力という観点で言いますと、学校の成績とか偏差値というのは、限りなく機能しなくなっていると考えた方がいいと思います。その代わりは何かといえば、その人物

がもっているそれなりの知恵、それは学校から学ぶものではなく、親から伝播したとか、おじいちゃんやおばあちゃんから伝播したもので、そのようなものを持っている人には敵わないと思えるところがあります。企業の人と話をしていると、同じことを言われます。

それでは、大学・短大が、学力というものをどのように考えているかと言えば、相変わらず、AとかダブルAとか、A・B・Cで判断していると思うのです。そこに別の要素が入ってくるかといえば、入ってき始めたのです。例えば、ボランティア活動などを考慮して、これを単位のうちに入れるとか、義務付けるということが始まっていますが、相変わらず大学の教員は、A・B・C、あるいは、優・良・可などの概念に縛られている。この概念をいかに解くかということがあります。

それから、企業が求める能力というのは、先ほども出ましたが、コミュニケーション能力。それは人と人との関係がちゃんと保てるかということを経験としてみていることだと思います。

またユニバーサル化ということが言われていますが、このユニバーサルということは、言い換えれば普遍的、普遍性ということです。これは高等教育の世界では、完全に<全入>という意味に読みかえてしまっているわけです。全入の時代にさしかかった場合の、学力とは一体何かと言えば、それは、やはり偏差値をいかに破壊して、別な価値をもたらすかということが私たちに課せられているということだと思います。刻々このユニバーサル化ということが広がっていくわけですから、模索しなければならない。

学生が自覚する学力というのは何かと言えば、やはりダブルAです。近年、学生はこのダブルAに非常にこだわる学生がむしろ広がっています。固執する学生が目立つようになってきます。序列の再構築ということ言えば、新しい学歴社会が、今広がっているのではないかと見ています。勝ち組と負け組みという概念は、0か1かということです。0と1です。インターネットが進化するに従って、もっともこれが深化していくと思えるのです。いままでとは違った学歴社会が実は始まっている、その途中にどっぷり入ってしまっているということです。そういう認識を持たなければならないと思います。

(7) 継続的なカリキュラムの追求

初等・中等教育と高等教育を繋ぐ学力とは何かと言えば、よく大学人は、高等学校との接続ということを経験前から言ってきました。<接続>という概念はあっても、さてそれはどうということなのかということについては、答えが出ていない。つまりは高等学校のカリキュラムをどれほど私たちが承知しているかということが問われている。高等学校は中学校のカリキュラムをいかに承知しているかということが問われている。したがって、これからの文部行政は中学一年生から高校三年生までの一貫教育ということを出しています。おのずから、一年から六年までという教育体制を追求する、これがもっと露骨になってくるはずなのです。結局のところ、どうなっていくかと言えば、中学校と高校が一緒になってしまう。だから継続的なカリキュラムを追求しなければいけないということになって、それを先取りしている高等教育が評価される時代がすぐそこまでやってきていると思っています。

それから、これまでの10年間の学力の推移というのは、圧倒的に低下傾向にある。しか

もそれを外国から言われると弱いわけです。3年前ですか、小学校・中学校の教科書から、**鷗外と漱石を排除してしまっただけ**です。どうしてかと言ったら、小学生や中学生には難しすぎる、そう言って排除してしまっただけです。これは事件だった。ところが、OECDが、読解力が低下したと指摘した途端、**漱石と鷗外は復活すべきだ**という議論が出ているのです。わが国の教育行政というのは、そのようなものなのです。これと言った、確定した基盤がほとんどないのです。高等学校の検定教科書を25年、つまり四半世紀、作ることに携わっていますが、非常にそのことがよく分かります。どんどん中学生並みの教科書になっている。

これからの10年の学力の推移を予測するということは、今現実がどういうふうにして、ここに至っているかということを知ることだと思ふのです。あれから、それから、これから、というものです。過去、現在、未来、といひましようか。私たちの歴史認識が問われてくるわけです。

日本の将来と労働力ということになりますと、フリーターとかニートを減らすべきという議論に当然なるわけですが、私は絶対に減らない、増加する傾向はもっと強まるだろうと思ひます。ニートは昨年、大よそ六十数万人、七十万人弱でしょうか。この人たちが一年で十万人ずつくらい増えていく。何もしない。要するに税金も納めていないということになっていけば、こういう人たちを抱えていかざるを得ないのか、それとも労働力は外国に求めるしかないのか、ということになっていきます。恐らく、国ではこれは仕方がない、乗り換えるしかないというところに、たぶんいつているのだと思ひます。私たちが、国の政策を現実に新聞やテレビで知るということになるのは、何かが施行されてから5年から7年ぐらいの落差があると思ひます。したがって予測というのは、なかなかし難いのですが、まず絶対、減少傾向にはないだろうということ踏まえて、さてどうするという事です。

(8)大項目・中項目・小項目に区分して考える

本題に戻しますが、先ほど来申し上げておりますが、読むこと・書くこと・話すこと・聞くこと・見ることをその人の能力に合わせた形で徹底的に、大真面目にやることです。おじいちゃん、おばあちゃんの話丁寧聞くことも一つのことばの力の養成、力をつけていく方途だと考えています。

資料集に『就職問題に関する諸項目・私見』というのを書いています。私たちはテレビに馴染んでいますが、新聞でいうと一面と三面では意味が違ふ。テレビは全部ぶち抜いて、ミシシッピのハリケーンの話ができたかと思うと、次のコーナーでは、芸能人の結婚・離婚・出産の報道を行って、ほとんど項目が羅列されているだけ。しかし、新聞では、二面と社説の面、それぞれ一面ずつ役割があるのです。受け手の側としては、百科事典のように、大きく分けて、大項目・中項目・小項目という分け方をしています。

例えば我われが、学生の就職に取り組む場合に、これから先、日本ではどういう雇用形態が進み、どのようになっていくのかということについての認識が大項目、それから高等教育における取組みがどうなっているのかというのが中項目、そして私たちの現場というのが平たく言えば小項目、と言う具合に、大きく分けて3つ、それが無理であれば、2つくらいに分けて、大枠と私たちの現場の取組みとを区別しながら、枠組みを組んで、今、私たちが

どこに位置しているのか、そしてこれから一体、どこに行くのか、そのように学生に問い続ける必要があると同時に、私たち自身に問い詰める必要がある。今私たちはどこにいるのか。ということは、溯って私たちはどこから来たのかということを知っていなければ、自分の位置が定まらない。ですから、当然、以前はこうだったけれども、今はこうなっているという認識が必要になってきます。

言い換えると、物事の考え方の筋として、私たちは何処からやってきて、何処にいて、何処にいこうとしているのかということを知り、頭の中に貼り付けて、今日は終わらしましょう。

どうもご静聴ありがとうございました。